

令和元年6月12日現在

機関番号：32103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02323

研究課題名(和文)日本人によるショパン作品の演奏解釈の変遷と研究との関わり

研究課題名(英文) Transition of the Interpretation of Chopin Performances by Japanese Musicians and its Relation with Previous Studies

研究代表者

岡部 玲子 (OKABE, REIKO)

常磐大学・人間科学部・教授

研究者番号：00513152

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本人によるショパン(1810-1849)の作品の演奏解釈の変遷と研究との関わりについて考察すること、および、最終年度にワルシャワで行われるNIFC(ポーランド国立ショパン研究所)主催の「国際ショパン学会」で成果を発表することであった。

NIFCでの音源調査、資料調査を実施し、国際ショパンピアノコンクールにおける参加者の使用楽譜に関するデータも入手し、分析・考察した成果は活字発表した。本研究期間中に、主に日本人とショパン作品の演奏解釈の変遷をテーマとして、論文発表4件、口頭発表11件(うち国際学会発表は、2年目に研究分担者の加藤一郎、最終年に岡部玲子と研究協力者)を実現した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ショパンの演奏研究について、日本ではその研究成果が実際の演奏に反映されているかは検証されたことがなかった。本研究は演奏表現と研究成果として示される楽譜との関わりについて考察した総合的な研究である。ポーランド国立ショパン研究所との信頼関係を作りあげ、貴重なデータを提供していただいたこと、および、研究の最終年には、ワルシャワの国際ショパン学会で、明治期における楽譜や楽器と日本人によるショパン作品の演奏との関わりについて英語発表し、日本の明治期におけるショパン受容および、楽譜や楽器と日本人による演奏との関わりについて、海外に直接発信することができたことに大きな意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine the transition of the interpretation of performances of the work of F. Chopin by Japanese musicians and how it relates with previous studies that were to be presented the International Chopinological Conference (ICC) organized by National Institute of Fryderyk Chopin (NIFC) in Warsaw.

This study was conducted by examining the sound and musical score sources at NIFC. The result of analysis and consideration were published "Different possibilities of performance interpretation regarding Chopin's Waltz Op.64 No.2 - Based on studies of editions" (2017), and "Choice of Editions and its Changes in the International Fryderyk Chopin Piano Competitions" (2018). In addition, at ICC the co-investigator presented the results of his research about Chopin's Study of Canons (2017), and Reiko Okabe and research collaborators presented the results of their research in "Performance Styles of Chopin's Music by Japanese Musicians during the Meiji period" (2018).

研究分野：ショパンのエディション研究、および、ピアノ演奏研究。

キーワード：ショパン ピアノ 演奏解釈 エディション(楽譜) コンクール 日本人 受容

1. 研究開始当初の背景

ショパン作品の演奏解釈に関する歴史的な変遷は、海外において積極的に研究が行われてきた。とりわけジェームズ・メスエン=キャンベルによる著書はショパン研究の基本文献として挙げられていた (Methuen- Campbell, James, 1981, *Chopin playing from the composer to the present day*. New York: Taplinger Publishing Company)。他にはトーマス・ヒギンスによる博士論文 (Higgins, Thomas, 1966, *Chopin interpretation; A study of performance directions in selected autographs and other sources*. Ph.D. dissertation, Iowa: The University of Iowa)、ジェフリー・コールバーグによる著書 (Kallberg, Jeffrey, 1998, *Chopin at the Boundaries*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University press) などもよく知られていた。しかしながら、日本人ピアニストによるショパン作品の演奏解釈がどのような変遷をたどっているかについては、当時はほとんど研究されていなかった。佐藤泰一により、国際ショパンピアノコンクールにおいてどのような演奏が評価されたのかが述べられた程度であった (『ドキュメント ショパン・コンクール その変遷とミステリー』東京：春秋社、2005)。

日本におけるショパン受容の先行研究は当時多くの研究成果が発表されていた。日本で初めてショパンの受容研究に本格的に取り組んだのは、本研究の代表者である岡部玲子による「ショパン作曲バラード第4番のエディションの系譜 No.2～ペダル記号と運指の数字～日本におけるショパン受容の研究へ向けて」(『常盤大学短期大学部研究紀要』第23号：57-71、1994)であった。そこでは、第二次大戦後に日本で出版された版がペーターズ社によって出版された版そのものであることが明らかにされた。世界に向けて発信された研究としては、田村進による日本におけるショパン受容の概要と日本人の精神性が述べられた研究 (TAMURA, Susumu, "The Reception of Chopin's Music in Japan", in Irena Poniatowska (ed.), *Chopin and his Work in The Context of Culture*; Volume 2, Warsaw: Polska Akademia Chopinowska, Narodowy Instytut Fryderyka Chopina, Musica Iagellonica: 467-473, 2003) が挙げられた。この論文の底本となる学会発表がなされたのは1999年であるが、岡部による研究成果をデータとして反映させ概要が述べられたにすぎなかった。本研究の研究協力者である多田純一は、岡部の研究を踏襲しつつ、近年発表された洋楽受容史研究を参照し、博士論文にて明治期におけるショパンの楽譜受容と演奏会記録および批評を考察することにより、書記性の伝播と第一次口頭性の関連を考察した (博士学位請求論文『明治期の日本におけるショパン像の形成 - 楽譜受容と演奏受容を中心に -』大阪芸術大学大学院、2012。『日本人とショパン』東京：アルテスパブリッシング、2014)。このように、日本におけるショパンの楽譜受容については明治期から第二次大戦後まで本研究の研究代表者および研究協力者によって明らかにされたものであった。明治期からショパン作品は演奏されており、日本人としてはじめてピアノリサイタルを開き「ショパン弾き」と呼ばれた澤田柳吉 (1810-1849) の音楽活動についても、多田が科学研究費「澤田柳吉の音楽活動に関する研究」(研究スタート支援、研究課題番号：24820066)により一定の成果を得た。澤田のショパン作品の録音音源についても多田監修のCD (『我が国最初の「ショパン弾き」澤田柳吉の世界～作品篇・演奏篇』(2枚組)東京：ミッテンヴァルト、2014)にて復刻された。

2. 研究の目的

研究開始当初、ショパン研究はショパンの祖国ポーランドを中心に、主に欧米各国の研究者によって牽引されていた。日本人研究者は海外の研究成果を反映させつつ独自の研究を進展させてきた。しかしながらその一方で、その研究成果が実際の演奏に反映されているかは、今までに検証されたことがなかった。そのため本研究では、演奏と研究の関わりに見られる問題点とその解明のための総合的な研究を目指した。さらに、本研究の最終年に、ポーランド国立ショパン研究所 The Fryderyk Chopin Institute (Narodowy Instytut Fryderyka Chopina, 以下NIFCとする) が主催する「国際ショパン学会 International Chopinological Conference」(ワルシャワ)にて成果を海外に発信することを目的とした。

3. 研究の方法

ショパン作品の演奏解釈の変遷と密接な関連を持つと思われたのが楽譜である。ショパンの死後、様々な楽譜が出版され、第二次大戦後には複数の出版社から原典版が出版されるなど、「ショパン問題」と呼ばれるほどに多くの楽譜が存在してきた。ショパンの書記性を伝播する楽譜の変化は、校訂者による研究成果の報告であると言える。

本研究では19世紀後半から現在までに出版された楽譜と録音された音源を、NIFCで調査・収集し、比較考察する事により、研究成果の反映である楽譜と演奏の関係を明らかにした。

ショパンの場合、国際ショパンピアノコンクールが5年に1度行われており、このコンクールによってどのようなショパン作品の演奏解釈が評価されるのかが明確にされる。日本人ピアニストも毎回多数参加している。それぞれの時代出版され、主として使用されてきた楽譜の中から、コンクール参加者がどのような楽譜を選択してきたのかを調査するために、コンクール主催者のNIFCに資料提供を依頼し、データの提供を受け分析・考察し、演奏との関連を考察する。

4. 研究成果

(1) 『「第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール」の芸術的・社会的意義に関する研究 演奏解釈と楽器及び楽譜の関連を通して』: 従来、ショパン作品を当時の楽器で演奏する試みは細々と行われてきたが、それを国際コンクールの中でメインの作曲家として取り上げることは無かった。本研究は2018年9月2日から14日までワルシャワで行われた「第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール」の芸術的・社会的意義を明らかにすることを目的として行った。本研究では、先ず、このコンクールを主催したポーランド国立フレデリック・ショパン研究所の活動に触れ、このコンクールの開催目的及び実施方法について検討した。次に、コンクールの際の演奏を分析することによってピリオド楽器によるショパン作品の演奏解釈の特徴について考察した。特に、このコンクールでは複数の日本人ピアニストが第二次審査に残り、その内一名が第二位に入賞したことから、日本人によるショパン作品の演奏解釈と楽器及び楽譜の関連について考察を深めることができた。

(2) 『ショパンの前打音に関する一考察 《バラード》第3番 変イ長調 作品47を例として』: 《バラード》第3番において、その前打音の奏法が、ショパンの弟子のカミーユ・デュボアの楽譜に、右手の前打音の最初の音と左手の1拍目の音を結ぶ線の鉛筆により付加されている。今日では、ショパンの前打音が、拍の前に出して弾くのではなく、拍の頭で他方の手と同時に弾き始める奏法であることは広く知られている。弟子の楽譜に書き込まれた奏法の情報が、後に出版されたエディションにおいて譜面上にどのように反映されてきたのかを調査し、その後、各年代における代表的なピアニストの演奏の録音により、その箇所がどのように演奏されているかを調査した。演奏法と楽譜との関連について考察した結果、今回の調査の範囲では、前打音の奏法は1990年頃を境に前打音を拍の頭に合わせるものが一般的になったこと、それに対する楽譜の影響として、まずはウィーン原典版(1986)、そしてさらに新しい原典版のエキエル版(1997)、ペータース版(2006)が考えられることが明らかとなった。また、1950年前後に日本で出版された楽譜に、前打音を拍の頭に合わせる指示がなされていたことが注目された。この点に関しては、1950年前後の日本人による演奏の入手が困難だったため、今後の課題とされる。

(3) 『フリデリク・ショパン国際ピアノコンクールにおけるエディションの選択とその変化』: 5年に1回ポーランドで開催される「ショパン国際ピアノコンクール」において、参加者が使用したエディションについて、各回の特徴と過去3回における推移をデータとして提示し、その傾向を考察した。データは、ナショナル・エディションが推奨楽譜として指定された2005年以降の過去3回(第15回:2005年開催、第16回:2010年開催、第17回:2015年開催)に、参加者が主催者に提出した使用エディションに関する情報を主催者のご厚意で研究のために提供していただいたものである。その結果、パデレフスキ版からナショナル・エディションへ移行していること、楽譜の併用に関しては、併用する人数も併用の仕方も減少してきていたことを、データとして今回初めて明らかにすることができた。演奏との関わりについては今後の課題である。

(4) 『ショパン作曲《ワルツ》嬰八短調 Op.64 No.2 に関する演奏解釈の可能性 エディション研究により明らかにされること』: ショパン作曲《ワルツ》嬰八短調 Op.64 No.2 に関して、ショパンが関わった可能性のある10種類の資料とショパンの死後に出版された34種類の出版譜のエディション研究を行い、その違いと系統関係などを解明し、そこから新たな演奏表現の可能性を探ることができた。

(5) ‘Performance Styles of Chopin’s Music by Japanese Musicians during the Meiji period’: 研究対象とする時期を明治期に限定し、先行研究を示しつつ、演奏、楽器、楽譜、の3つの要素から日本人によるショパン作品の演奏とその時代背景を考察した。その結果、1.演奏形態と受け入れられた楽譜への関連、2.国産ピアノの年産台数とピアノ独奏によるショパン作品の演奏との関係、3.オルガンやヴァイオリンによる演奏から小品のピアノ独奏、そして規模の大きな作品の演奏からピアノリサイタルの開催へと、演奏される作品と形態が徐々に大きくなっていく変遷を見ることができた。日本におけるショパン受容という大きなテーマの中に、小規模の作品から大規模な作品へ、そして、1曲のみの演奏からリサイタルへと規模が大きくなる様子を明らかにした。日本の明治期におけるショパン受容および、楽譜や楽器と日本人による演奏との関わりについて、海外に直接発信することができたことに大きな意義がある。(英語発表)

(6) ‘Chopin’s Study of Canons: Technical Development, Chromaticism and Its Relationship with the Aesthetics of His Late Style’: ショパンの対位法については、既に多くの研究が行われてきたが、模倣対位法、取り分けカノンの技法については、これまで彼の後期様式との関連が指摘されてきたにも拘わらず、十分な研究が行われてこなかった。そこで、本研究はショパンのカノン及びカノン風パッセージに焦点をあて、その技法的発展について検討し、それ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

と彼の後期様式の美学との関係について明らかにすることを目的として行った。その結果、ショパンが1840年以降に書いたカノン及びカノン風パッセージは半音階的技法を多く含み、異名同音的転調、半音階的転調、そして増4度転調が頻りに用いられていた。それらは18世紀以前の対位法と19世紀中葉の音楽様式を独自の方法で組み合わせたものであり、彼の後期様式の特徴を示していることが分かった。本研究は、ショパンの音楽構造から彼の美学の特性を明らかにしたものであり、これによって、本研究課題の「ショパン作品の演奏解釈の変遷」における美学的視座を示すことができた。(英語発表)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 4 件)

加藤一郎、「第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール」の芸術的・社会的意義に関する研究 演奏解釈と楽器及び楽譜の関連を通して、国立音楽大学研究紀要、査読無、第53集(1)、2019年、pp. 91-102

岡部玲子、ショパンの前打音に関する一考察 《バラード》第3番 変イ長調 作品47を例として、常磐大学人間科学部紀要「人間科学」、査読無、第36巻1号、2018、pp.21-29

岡部玲子、加藤一郎、武田幸子、フリデリク・ショパン国際ピアノコンクールにおけるエディションの選択とその変化、常磐大学人間科学部紀要「人間科学」、査読無、第35巻2号、2018、pp.15-27

岡部玲子、加藤一郎、武田幸子、多田純一、ショパン作曲《ワルツ》嬰八短調 Op.64 No.2に関する演奏解釈の可能性 エディション研究により明らかにされること、常磐大学人間科学部紀要「人間科学」、査読無、第34巻2号、2017、pp.15-31

[学会発表](計 11 件)

Reiko Okabe, Sachiko Takeda, Junichi Tada, 'Performance Styles of Chopin's Music by Japanese Musicians during the Meiji period', International Chopinological Conference 2018, The Fryderyk Chopin Institute, 2018/9/28, The Institute of Art of the Polish Academy of Science, Warsaw.

多田純一、エディションの選択とその伝承、日本音楽表現学会第16回大会、2018、広島文化学園大学長束キャンパス

岡部玲子、ショパンのエディションをどう捉えるか? ~ショパン国際ピアノコンクール出場者の選択、お茶の水女子大学音楽科卒業生の会講演、2018、お茶の水女子大学

Ichiro Kato, 'Chopin's Study of Canons: Technical Development, Chromaticism and Its Relationship with the Aesthetics of His Late Style', International Chopinological Conference 2017, The Fryderyk Chopin Institute, 2017/9/4, University of Warsaw.

多田純一、ショパン作品のエディション研究 《エチュード》Op.10 No.3を例にして「ピアノのサロン 記譜と演奏」、日本音楽表現学会第15回大会、2017、東京音楽大学

岡部玲子、ショパンの楽譜、版による違いにどう向き合うか エディションの違いから読み解くショパンの音楽、演奏表現学会、2016、東京芸術劇場ミーティングルーム

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：加藤 一郎
ローマ字氏名：KATO, Ichiro
所属研究機関名：国立音楽大学
部局名：音楽学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：60224490

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：多田純一、武田幸子
ローマ字氏名：TADA, Junichi、TAKEDA, Sachiko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。